



AUE News



2011年11月15日

第 28 号

編集・発行
愛知教育大学広報部会
TEL 0566-26-2738
FAX 0566-26-2500

目 次

- 省エネニュース@愛教大
- 行事予定(11月16-30日)
- トピックス
 - ・多文化共生公開講演会
 - ・「外国人児童生徒を軸とした多文化共生社会を目指す教育支援の構築事業」講演会
 - ・林剛一教授バリトンリサイタル
 - ・日本経済政策学会第45回中部地方大会
 - ・科学・ものづくりフェスタ@愛教大
 - ・附属岡崎小学校創立110周年記念式典
 - ・刈谷産業まつり
 - ・書友会成果展
 - ・秋のランチコンサート
 - ・エコ・リーグ CCC 実行委員会が本学を取材
 - ・地域連携フォーラム 2011
- お知らせ・報告・投稿
 - ・台湾国立彰化師範大学で国際会議と創立40周年記念式典に出席
 - ・文科省関係機関等職員駅伝競走に本学チーム参加
 - ・「日銀グランプリ」決勝に本学学生が出場
 - ・催しものの案内

省エネニュース@愛教大

2011年度愛知教育大学緊急節電対策の啓発活動として、「AUE News」で省エネに関するニュースをお知らせします。今回はNo.10(作成は「省エネワーキンググループ」)です。皆さん、引き続き、節電にご協力ください。

NO10 排水処理の効率化で節電！



排水処理施設
構内(汚水・雑排水)を処理！



排水処理施設

「長時間曝気方式」を採用しています。
微生物を利用して、汚水中の有機性汚泥物質を取り除いています。

排水処理施設「省エネ」のポイント

- ①2011年度までに排水処理の高効率化により、約13万kWh/年(理論値)削減しました。
全体電力使用量に対して2%削減したことになります！
(溶存酸素濃度により曝気用送風機をインバータ制御、送風機能力の見直し)



行事予定(11/16-30)

- 16 日(水) 教員人事委員会 (13:30～ 第三会議室)
財務委員会 (15:30～ 第五会議室)
18 日(金) 附属学校運営委員会 (10:00～ 第三会議室)
21 日(月) 経済支援専門委員会 (16:40～ 第二会議室)
安全衛生委員会 (16:40～ 第五会議室)
22 日(火) 役員会 (13:00～ 学長室)
永年勤続者表彰式 (11:30～ 第五会議室)

トピックス

多文化共生公開講演会(11/2)

多文化共生に関する公開講演会が 11 月 2 日(水)、第二共通棟で開催された。本学の教育創造開発機構・地域連携センター主催、本年度の文部科学省特別教育経費による事業で、「外国人児童生徒のための学習支援事業講演会」計 3 回のうちこの日は 2 講演が行われ、学生、教職員らが参加、熱心に聞き入った。



多文化共生の講演は 422 教室で、1, 2 年生の学生、教員ら 70 人が参加。講師は二谷貞夫上越教育大学名誉教授で『「地球世界」時代に目指す多文化共生～社会と教育が担う課題』をテーマに熱弁を振るった。二谷氏はまず、東日本大震災の写真集を手に「現実起こったことを(記録として)貯め込んでおくと、教師として教壇に立ったとき、当時を思い起こして子どもたちに話すことができる」と社会に目を向けることの大切さ、教師の心構えを説いた。

続いて、外国人の居住者が増加し、日本はすでに多文化共生社会であり、中国、ブラジルなど在外国人の子どもが日本で育っているなど質的な変化が起きていると指摘し、いろいろな形で語られる共生について整理して考える必要性を強調した。共生の定義について社会学者の言葉を引用しながら「共生とは差異性を持った人々の間の対等性とコミュニケーションがあること」と述べて解説した。また、大震災、惨事便乗型資本主義、選挙における若者の投票率の低さ、福島第一原発事故などについてさまざまな見方を紹介しながら「多文化共生を目指すことで地球、人類は救えるか」「なぜ被爆国が史上最悪の原発事故国になってしまったのか」などと問いかけた。最後に学生からは「教壇に立った時のために自分の考えをまとめたいと思った」「原発はこれからどうすべきか」との質問が出され、今回の講演が自分磨きの機会になったことを裏付けていた。



これに先立つ講演「外国人児童生徒のこころの理解と対応」は 412 教室で行われ、長野県スクールカウンセラー、茅野理恵氏が講師を務め、外国人児童生徒がどのような喪失感を抱えやすいかについて説明、約 50 人の学生は聞き入っていた。

なお、3 回目の講演会「多民族国家シンガポールにおける学校での民族融合の現状と課題」は 11 月 30 日(水)午後、本学第一共通棟 312 教室で開催。シンガポール教育大学教員らが多文化尊重の意識を学校教育でどのように実現を図っているかを話す予定。参加無料。誰でも参加できる。

「外国人児童生徒を軸とした多文化共生社会を目指す教育支援の構築事業」講演会(11/3)

外国人児童生徒支援リソースルームでは、毎年、外国人児童生徒支援に係る講演会を開催して

います。今年度は、「“こころ”と“ことば”をどう考えるか～外国人児童生徒を支える就学前からの必要な視点～」のテーマで、11月3日（木）午後1時から本部棟第五会議室で、二組の講師に来ていただき、二つの講演を行いました。



第Ⅰ部は、「ことばと心の育ち」として講師の飯高京子先生（東京学芸大学名誉教授、上智大学国際言語情報研究所名誉所員、国際友和会理事、特定非営利法人木馬の会監事）が、幼児期の言語発達や母子関係の形成が言葉の育ちに重要であることを分かりやすく説明してくださいました。

第Ⅱ部は、「日本語を学ぶことが先なのか」というテーマで、竹内淑子先生（東浦町立石浜西小学校研究主任）を中心とした4名の先生方が、石浜西小学校で行っている「2教科同時進行単元内自由進度学習：〇〇（まるまる）学習」について、実践活動に基づいたお話をしていただきました。

当日は、70名の定員に対し、100名を超える申し込みがあり、本学の学生はもとより、現場の先生方、遠くは兵庫県、大阪府、滋賀県からもおいでいただきました。講師の先生方も、領きながら熱心に聞いてくださる参加者の様子から、質疑の時間がほ



とんど取れないほどの熱のこもったお話をしてくださいました。

終了後のアンケートからは、第一部についても第二部についても、具体的な事例に基づいたお話であったことから分かりやすかったという評価をいただきました。一方で、講演に基づいたワークショップなどの開催の希望や、時間が短いというご指摘も頂きました。



愛知教育大学の外国人児童生徒支援の活動についても、さらなる情報発信を求める意見を多くいただき、今後の活動の方向性、事業の内容に多くの助言をいただきました。ありがとうございました。（日本語教育講座准教授 上田崇仁）

林剛一教授バリトンリサイタル(11/3)

文化の日の11月3日（木）午後7時から、林剛一教授（音楽教育）が名古屋市中区の電気文化会館「ザ・コンサートホール」でバリトンリサイタルを開催した。



林教授は東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修了。多くの演奏会に出演し、ソリストとして、またオペラの主要な役を多数演じるなど、幅広く活躍。1996年には、文部科学省在外研修員としてローマで世界的名歌手のジュゼッペ・ダッディ氏の下で研鑽を積み、以来15年間、氏の指導を受け、2000年、01年、03年の3度、氏を名古屋に招きオペラコンサートを開催し、共演。そのダッディ氏が昨年6月に93歳で亡くなり、今回のリサイタルでは氏に指導を受

けた曲目の中から14曲を選曲し、「恩師と共に」の思いを込めて臨んだ。さらに、ダッディ氏が存命中に「私が死んだら、ボエーミに習え」と遺した教えをそのままに、ヨーロッパを中心に活躍中のオペラ指揮者のマルコ・ボエーミ氏が伴奏者を務めての開催となった。

第1部はモーツァルト作曲歌劇「コジファン トウッテ」よりグリエルモのアリア「彼に目を向けてください」など3曲。華やかな旋律の潤いある伸びやかなバリトンが満員の会場に響き渡った。第2部はロッシーニ作曲歌劇「ウィリアム テル」よりアリア「お前を祝福してやろう～じっと動かないで」など4曲、第3部はジョルダナーノ作曲歌劇「アンドレア シェニエ」よりジェラルムのアリア「祖国の敵」など4曲、第4部はデンツァ作曲の歌劇など3曲。時に悲しみや葛藤、怒りをドラマチックに、時に恋へのあこがれや愛情を明るく伸びやかにと、全身全霊を

込めた熱唱で観客を魅了した。

林教授は「去年 6 月、お世話になった大切な人を亡くしました」と声を詰まらせる場面も。

「（恩師ダッディ氏から）バリトンには 55 歳がピークと言われ、それまであと 5 年。まだ納得した歌が歌えませんが、5 年後に期待していただきたい」と晴れやかな表情で挨拶した。

その後も拍手が鳴り止まず、アンコールの 3 曲を歌い上げ、盛況のうちに幕を閉じた。

日本経済政策学会第 45 回中部大会(11/4,5)

11 月 4 日（金）、5 日（土）に中部国際空港において日本経済政策学会第 45 回中部地方大会を開催しました。今回の大会は愛知教育大学が開催担当校となり準備と当日の運営を行い、学会の新たな取り組みとして会場を中部国際空港にて開催しました。会場に中部国際空港を選んだのは、ものづくり愛知で生産された製品の流れを体感することで中部の経済活動の物流拠点としての役割を学び、経済政策の研究と実践に活かすためです。また、中部国際空港は地域とのかかわりを重視しており、様々なイベントや取り組みを行っており、学会の開催を行うことで貢献できればと考えました。

4 日は施設見学会として「国際物流の拠点となる空港の役割とその経済的効果」をテーマに中部国際空港の貨物関係の施設と港湾、旅客ターミナルビルの見学を行いました。最初に概要説明を受け、その後、日本航空の貨物上屋を見学しました。貨物上屋は柱をなくす、底を大きくする等、機能的に設計されていました。取り扱っている荷物は機械部品が多く、大きな荷物では自動車を積み込む準備をしていました。自動車はじめ製造業の製品輸送に果たす役割の重要性を認識しました。

次に DHL の貨物上屋に移動し、国際宅配便が主要都市であれば翌日には届くという仕組みを学びました。このようなスピードで届けるためにネットワークが整備されていることや、仕分け機のデモンストレーションによって高速で荷物が行き先毎に仕分けられるシステムを知りました。

さらに、空港内の港の見学を行いました。中部国際空港へ船でボーイング 787 のパーツを運び、大型輸送機（ドリームリフター）に積み込んで輸送するための港が整備されています。このような施設は他の空港にはなく、国際分業を支える重要な施設となっています。

当日はドリームリフターが駐機しており、その巨体をスカイデッキから見ることができました。空港のスケールや迫力、機能性と多様性を実感することができる見学会になりました。

5 日（土）は研究報告会と震災特別セッションをセントレアホールにて開催しました。約 50 名の参加があり、震災特別セッションでは本学の学生や一般の方の参加もありました。

研究報告会では 4 件の発表があり、環境問題等の諸課題を経済政策によっていかにして解決するかを考えました。その後の震災特別セッションでは、経済政策の視点から名古屋学院大学学長の本船久雄氏から「震災復興とエネルギー環境政策」、同講師の村上寿来氏から「震災復興における被災者支援政策」という二つの報告があり、それに基づいた質疑応答を行いました。わが国において多くの人命が失われ甚大な被害を引き起こした震災が発生したことは社会にとって大きな転換となり、新たな政策が求められています。また、震災によって生じた原子力発電所の事故は深刻な事態を招き、各国のエネルギー政策の転換を招くことになりました。このように震災によって大きな変化が起こっている中で、過去の災害の経験を踏まえた被災者支援政策の在り方や、厳しい状況の中での新たなエネルギー政策の推進について、講演によって最新の研究動向を知ることができました。また、活発な質疑応答で理解を深めることができました。



研究報告会終了後には空港内のクイーンアリスアクアにて懇親会を開催し、和やかな雰囲気の中で有意義な意見交換を行いました。

厳しい経済状況が続く中で、社会の転換を進めるために経済政策の重要性は益々高まっています。今後とも本学会へ多くの方が参加され、経済政策の研究の発展とその実践が進められることを願っています。

最後になりますが、今回の学会開催にご尽力頂きました中部国際空港の皆様、施設見学にご協力頂きました日本航空、DHLの皆様、学会開催に助成して頂きました大幸財団に厚くお礼申し上げます。

愛知教育大学名誉教授 梅下 隆芳（大会準備委員長）
地域社会システム講座准教授 水野 英雄（大会準備委員）

科学・ものづくりフェスタ@愛教大(11/5)

本学の日ごろの活動を広く社会に紹介すると共に、科学・ものづくりの面白さや楽しさを実感してもらおうというイベント「第5回科学・ものづくりフェスタ@愛教大」が11月5日（土）、第一共通棟などで行われた。



今回は本学教員・学生による「訪問科学実験」「ものづくり教室」「教材開発工房」「天文台一般公開」による企画と、卒業生、現役の学校教員や外部協賛団体による企画など、合わせて46のプログラムが展開された。午前10時、受け付け前には開場を待つ親子連れの行列ができ、フェスタのガイドブックを受け取ると、早速、それぞれお目当ての教室へと向かった。中でも一番人気は「巨大シャボン玉に入ろう!」。巨大なシャボン玉の中に全身すっぽりと覆われる珍しい体験ができるとあって、シャボン玉に入った瞬間をカメラに納める親子連れでにぎわった。「空気砲で遊ぼう」



では、段ボール箱で作った空気砲で積み上げた紙コップの山を吹き飛ばすなど、ゲーム感覚で空気の圧力を実感。「マイナス196度の世界」では、液体窒素に浸して一瞬で凍った葉っぱを握って粉々にする実験など科学の不思議な現象に子どもたちの目がくぎ付けになっていた。木製パズルやマグネット、カラフルイクラ、立体図形工作などのものづくりの会場では、子どもだけでなく大人も夢中にな

って取り組む姿が多く見られた。

ランチタイムレクチャーでは、児玉康一教授（理科教育）による講演「宇宙線と放射線」が行われた。大地を起源とする放射線物質からの放射線と、宇宙を飛び交っている宇宙線を起源とする



放射線について、構造や性質などを解説。放射線を直接目で見ることはできなくても、空気などの物質を通過する際に引き起こす現象を利用して放射線をとらえることができる「霧箱」を紹介。参加者からは「治療に使われる放射線と、人体に影響のある放射線はどう違うのか」などの質問もあった。



この日の来場者は約800人。秋の一日を科学実験やものづくりの体験で満喫していた。

附属岡崎小学校創立110周年記念式典(11/5)

11月5日（土）くすのきの日に、愛知教育大学附属岡崎小学校創立110周年記念式典を開催しました。ご多用の中、愛知教育大学学長松田正久様をはじめ、多くのご来賓の方にもご参加いただきました。また、歴代の学級理事の方々にもご参加いただきました。

式典では、これまで附属小学校を支えてきていただいた歴代の校長先生やPTA会長、同窓会会長の皆様に感謝状をお送りいたしました。また、卒業生の先輩方をお招きし、当時の授業の様子や、そのときに学んだこと、



そして今もその学びが生かされていることなどを語っていただきました。附属岡崎小学校でしか経験できない学びを熱く語っていただく中で、子どもたちの主体性を大切にし、子どもありきの本校の教育の確かさを改めて知ることができました。

続いて、子どもたちのこれまでの活動を DVD で振り返りました。学校行事に目を輝かせて取り組む姿や、歯を食いしばってがんばる姿は、これまでの卒業生にも負けない輝きを感じました。また、代表児童からは、附小の今、そして未来への決意と願いについて意見発表がありました。110 年目の附属岡崎小学校にいる自分たちこそが新たな歴史を作りつつあるのだという自覚と決意を堂々と述べていました。

附小の「過去を知り、今を見つめ、未来に夢を描く」をテーマにした式典は、附属岡崎小学校の歴史の新しい 1 ページとして、子どもたちの胸の中に刻まれました。

(愛知教育大学附属岡崎小学校 教頭 稲留雄一)

刈谷産業まつり 2011(11/5,6)

刈谷産業まつりが 11 月 5 日(土)、6 日(日)に刈谷駅北側の市産業振興センターで開催され、6 日に本学の学生たちも参加して、ものづくり教室や竹を利用したワークショップを行った。

この産業まつりは、広く一般市民に対して、「人と産業のふれあい、交流」をテーマに催されているもの。

本学では、地域連携事業の一環として参加しており、「愛教大のお兄さん・お姉さんをつくろう」を合い言葉に、美術科の学生は伝統玩具である「紙つばめ」を竹を用いて子どもたちと一緒に作り、技術科の学生は永久磁石、金属のキーホルダー、間伐材のパズル、形状記憶合金の熱エンジンの 4 種類のテーマで子どもたちを指導した。

ものづくり教室は、午前 10 時から受付が始まり、人気のキーホルダーから定員がすぐにいっぱいとなり、やむを得ず、他のものに変更する子どももいて、午前中に午後の部の受付も締め切るほど盛況であった。



竹細工については、作った「紙つばめ」が上手く回せず、学生に手伝ってもらった場面もあったが、上手く回るとニコリと笑い、皆で拍手をして喜ぶ姿があった。

各テーブルでは、学生の指導の下、熱心に作品を作っており、中にはお父さんやお母さんも一緒になって、親子で熱中して作品に取り組んでいたテーブルもあった。

また、大学のブースには、本学の地域連携事業を紹介するパネルや他大学での竹を利用した取組の写真も貼られていた。

(教育創造開発機構運営課課長 稲吉隆)

書友会成果展(11/7-13)

書道サークル「書友会」による作品展「書友会成果展」が 11 月 7 日(月)～13 日(日)、附属図書館のアイ・スペースで開催された。

4 回目の今年は、2～4 年の部員 5 人が、掛け軸 5 点と合作 1 点を出品した。例年に比べて、少なめの作品数となったが、部員たちが古い書物のお手本から、それぞれが好きな書を選んで、真似る「臨書」という手法で、何度も練習を重ねて書き上げた自信作を展示。合作の「温故知新」は、一文字ずつ書いた作品を持ち寄って仕上げた共同作品で、それぞれの個性が一つの作品になった楽しい作品になっている。



江川彩香さん（初等国語選修2年）の作品は、かつこよさが気に入って選んだという「多宝塔碑」の楷書で、「授業で何度も書いて、練習しました。まあまあの出来」。小島恵里子さん（同）も「一文字一文字を練習して、2 カ月～半年かかっています」と、それぞれ笑顔を見せた。

2 人は「臨書は、いかに似せるかが大切。書くたびに、こういう風に書くとこうなるんだと、同じ文字でも書くたびに違って、奥深さがあるんです。この場で作品を展示することで、これまで書道に興味のなかった人でも、何かを感じてもらえたら嬉しいです」とアピールした。



秋のランチコンサート(11/9)

音楽教育の学生による恒例の「ランチコンサート」が 11 月 9 日（水）午後零時 30 分から、附属図書館アイ♥スペースで行われた。

季節ごとに趣向を凝らして年 4 回開かれている同コンサート。今回は大学院生 10 人が、構成から進行、出演まですべてを担当し、声楽、ピアノ、マリンバ演奏など計 7 プログラムを披露した。

プログラムの最初は田中美穂さんによるソプラノ独唱「すてきな春に」、伸びやかな声で春の華やいだ雰囲気表現した。大石幸奈さんはマリンバ独唱でエリック・サミュ作曲「リベルタンゴ」を演奏。木管独特の温かな音色がテンポよく弾んで、観客を楽しませた。バリトンの蕃洋一郎さんはソプラノの田中さんと 2 重唱で、モーツァルト作曲の歌劇「フィガロの結婚」の一場面から、愛し合う 2 人の心模様をユーモアたっぷりに熱演、観客を沸かせた。



福井里佳子さんはピアノでショパン作曲「バラード 4 番 op. 52」を披露、もの哀しさと激しく情熱的な旋律が交錯した演奏で、コンサートを締めくくった。この日は、学生や教職員など 50 人ほどが観賞し、お昼のひと時を音楽ライブで楽しんだ。

次回は来年、学部 4 年生によるコンサートを開催の予定。



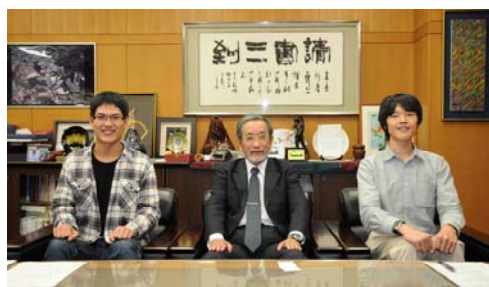
エコ・リーグ CCC 実行委員会が本学を取材(11/9)

11 月に発表された全国青年環境連盟（エコ・リーグ）が主催している第 3 回エコ大学ランキングにおいて本学が全国で上位（6 位）にランクインされたことを受けて、11 月 9 日（水）に実行委員会の学生 2 人（大阪大学の大学院修士 2 年と学部 1 年）が取材に訪れました。

取材内容は、環境対策の推進に至った経緯、実施状況や効果・成果事項について質問され、取材後美術・技術・家政棟にある太陽光発電設備を見学しました。その後、松田正久学長と面談。松田学長から、エコ・リーグの成り立ちや活動状況について質問があり、学生は環境重視型エコキャンパス創造型について、学長の思いを尋ねるなどして、歓談した。

実行委員会の学生は壁面緑化の取組状況に関心を示し、「今も積極的に取り組まれているようですが、今後も継続して取組してほしい」と要請した。

実行委員会の学生には、「学長をはじめとする学



生・教職員の省エネルギー啓蒙活動の取組により上位にランキングされた」と伝えましたが、これからも学内の省エネルギー活動にご協力のほどよろしくお願いします。
(施設課係長 山本真司)

地域連携フォーラム 2011(11/12)

本学主催の「地域連携フォーラム2011」が11月12日(土)午後、刈谷駅前の刈谷市総合文化センターで開催された。「大学と地域で創造する『地域文化づくり』一言語・コミュニケーション交流の活性化に向けて」をテーマに、5人のシンポジストが議論、教育関係者、自治体関係者、市民ら約60人が参加し、地域づくりに関する新鮮な意見に耳を傾けていた。

本学の松田正久学長が「本学は地域の皆さんの支援をいただきながら、協力して地域の発展に貢献したいと思っています。今後ともよろしく願います」とあいさつ。一宮登特別学長補佐の司会で開会。シンポジストは本学の中田敏夫教授(外国人児童生徒支援にかかわる大学と地域連携の現在と将来)、小川知恵研究員(英語教育における支援活動—小中英語支援室の活動を通して)、川合基弘知立市教育委員会教育長(外国人集住地区における共生教育と日本語指導)、山田基刈谷市教育委員会学校教育課長(外国人児童生徒の指導・支援の現状と課題)、小松弥生文化庁文化部長(多文化社会をつくる)で、それぞれのテーマ(括弧内)で意見を発表。日頃の取り組みや活動に対する考え方、課題などをデータ、資料を基に丁寧に説明した。

休憩を挟んで司会者から、各シンポジストに20分間の発表で、言えなかったこと、これだけは付け加えたいことまた他のシンポジストへの質問等があればとの発言があり、意見交換がなされた。

引き続き、質疑応答の時間では、会場の教員が、それぞれ現職者としての視点から質問するなど、白熱した意見交換となった。



質疑応答終了後には、各シンポジストから今回のフォーラムに対して、持ち時間各5分間の提言があり、中には本学への要望等も出され、貴重な提言や今後の検討課題も出されるなど、実り多いフォーラムとなった。

最後に、主催者を代表して、都築繁幸地域連携センター長が「今後も地域に根ざした連携支援に取り組んでいきたい」と述べ、今回のシンポジウムの総括とシンポジストに対して、

お礼の言葉で会を締めくくった。



お知らせ・報告・投稿

台湾国立彰化師範大学での国際会議と創立40周年記念式典に出席(報告)

10月20日(木)～23日(日)の日程で、台湾彰化市の国立彰化師範大学で国際会議(The Forum for International Education Leaders2011)及び創立40周年記念式典が開催され、協定校である本学から宮川秀俊国際交流センター長並びに神谷和征総務課企画評価室長の2人が出席しました。

台湾桃園国際空港に20日の12時過ぎに到着し、入国手続きを済ませた後、用意された乗り合いタクシーで高速道路をひた走り、宿泊先の全國大飯店(台中市)に15時30分過ぎに到着しました。当日は、18時から同ホテル内のレストランで、韓国、マレーシア、アメリカ、福岡教育大学の来賓者とともに、彰化師範大学の張恵博校長はじめボランティアとして参加の学生を交えて2時間ほど意見交換が行われました。

翌 21 日は、大学のバスに乗り 40 分ほどで彰化師範大学に到着し、同大学内の国際会議場においてフォーラムが開催されました。張恵博校長の基調講演の後、潘永忠マレーシア新紀元学院長による「マレーシアの教育の発展」の紹介があり、午後には、洪徳律大邱大學校総長から「大邱大學校の特殊教育」を、潘永忠学院長から「開学 1000 日の状況」を、羅螢福建師範大学書記から「高水準大学の推進」としてそれぞれ発表があり、休憩を挟んで、本学宮川秀俊国際交流センター長から「国際交流活動」を、William Ludwell Quint Oga-Baldwi 福岡教育大学副国際交流センター長から「国際交流の問題と概要」を、Venu Dasigi 南カリフォルニア工科大学教授から「国際協調」としてそれぞれ発表があり、質疑応答の後 16 時に閉幕しました。引き続き、彰化市役所の邱建向市長を表敬訪問して 1 時間ほど歓談し、その後八卦山大仏を視察しました。



22 日は同様に大学のバスで彰化師範大学に到着し、創立 40 周年記念式典に参加しました。学生によるマジックショー、合唱等の演技終了後、張恵博校長の開会挨拶に引き続き、来賓の祝辞、卒業生や教職員への功労者表彰などが行われ、盛会のうちに式典は終了しました。続いて、同大学内に設置した史料館のオープニングセレモニー、40 周年記念植樹、本部棟に設置した LED 大型スクリーンの除幕式など様々な催しが行われ、また、学内では学生による屋台など大学祭を盛り上げる催しも行われて、学生・教職員が一体となり 40 周年を盛り上げているように感じました。

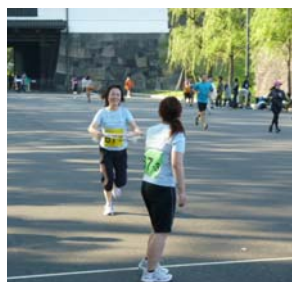
(総務課企画評価室長 神谷和征)



文部科学省関係機関等教職員駅伝競走大会に本学チーム参加(報告)

10 月 29 日(土) 第 19 回文部科学省関係機関等教職員駅伝競走大会が開催された。この大会は、東京の皇居桜田門をスタート・ゴールとする皇居周回コース(5km/周)を 1 名 1 周ずつ 4 名(男子は 5 名)でリレーするもので、本学からは若手女子職員 1 チーム(人事労務課：藤目 光さん、教務課：落合咲貴さん、学生支援課：後藤成美さん、情報図書課：稲葉裕美さん)が出場した。

最近のマラソンプームのせい、皇居のまわりはスタイリッシュなジョガーも大変多く見かけられ、今回の大会には、全国から男子及び混合 54 チーム、女子 7 チームがエントリーした。



13 時 30 分、秋晴れの空の下、「食まる T シャツ」を着たメンバーのタスキリレーが始まった。

学生時代以降、長距離を走ったことのないメンバーもあり、彼女たちからみれば 5km という距離はとてつもなく遠いものを感じただろう。

しかも、わずか 1 カ月半の練習期間、終業後の短い練習時間という厳しい条件の中、時には 1 日 7km 以上の距離を走り、厳しい練習に耐えた。

15 時 31 分、1 名平均タイム約 30 分でタスキをつなぎゴール。

結果、女子チーム最下位のゴールであったが各走者のタスキを渡す瞬間の顔は、達成感に満ちあふれたものであった。



集団で走る練習時とは異なり、孤独感と自分との戦いに勝ち、1本のタスキをつないだ4名のメンバーはお互いの健闘をたたえ合っていた。

(人事課係長 吉池和正、教務課係長 田中哲之)

「日銀グランプリ」決勝に本学学生が出場(報告)

日本銀行が大学生を主な対象にした金融分野の小論文・プレゼンテーションのコンテスト「第7回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」が行われ、本学の学生が決勝に進出することが決まった。

同コンテストは、学生に金融に関心を持ち、日本の金融の現状と将来について自分たちの問題として考えてもらいたいと、2006年から実施。小論文での予選を行い、そこで選ばれたチームが日本銀行本店で決勝に臨み、日銀副総裁などの審査員を前にプレゼンテーションを行う。今回の課題は「わが国の金融への提言」で、全国から計108件の応募があり、本学チームも決勝進出の5チームのうちのひとつに選ばれた。

チームは、現代学芸課程国際文化コース3年の鵜飼遙佳さん、前田宗誉さん、村井望さんの3人。「先生のための金融教育(小学校編/中高編)」のタイトルで、将来先生になる学生が子どもたちに金融教育をするためにどのように金融について学ぶべきかを、A4用紙26ページにまとめ上げた。9月に応募、11月半ばに結果が伝えられた。

「出しちゃおう!と応募したら、電話で決勝進出を知らされて驚きました」と前田さんと鵜飼さん。村井さんは9月から本学協定校のドイツ・フライブルク教育大学に留学中で、2人からのメールで吉報が届けられた。

論文を指導した水野英雄准教授(地域社会システム)も「審査は経済に関する日本のトップレベルの学識経験者等によるもので、高い水準の内容であることが求められています。経済系学部からの応募が多い中で、経済に関する専門科目の少ない教育学部からの決勝進出は珍しい」と驚きと同時に喜びを隠せない。



決勝は12月3日(土)に日銀本店で開催され、各チームが15分間のプレゼンテーションを行った後、審査員との間で質疑応答を行う。鵜飼さん、前田さんはプレゼンテーションに備え、内容の整理、資料作成、話し方などの練習も開始し、ドイツの村井さんとも連日、メールや動画を通じて連絡を取り合っているという。「どうなるか分かりませんが、とにかく悔いが残らないように精一杯やりたい」と2人は準備に余念がない。決勝進出は他に東京大、

催しもの案内

◆「市川房枝 没後30周年記念企画展」

11月17日(木)～12月20日(火) *11月26日(土)27日(日)は休館
附属図書館2階 アイ♥スペース 入場無料

愛知県女子師範学校(愛知教育大学)を卒業し、男女共同参画に偉大な功績を残した市川房枝さんの生涯を、パネル・蔵書・遺品を展示して紹介。

問い合わせ: 情報図書課 TEL 0566・26・2683/2687

<http://www.auelib.aichi-edu.ac.jp/>

◆第4回リベラル・アーツ Edu セミナー

11月17日(木) 16:40~18:40

大学会館2階 中集会室

対象: 本学教職員、理事

本学LAプロジェクト主催。リベラル教育の理念やその実践の方法について意見交換する。帝京大学経済学部教授・松井範惇氏を講師に迎え「リベラル教育の理念と実践—私の経験から—」をテーマに講演。

問い合わせ: LAプロジェクト担当 TEL 0566・26・2718

◆教育臨床総合センター講演会「ろう者と聴者のこころのかけはし」

11月19日(土) 13:00~16:45 入場無料

第二共通棟3階 431教室

どなたでも参加可能。第1部は映画上演と監督の小講演「珈琲とエンピツ」(本学卒業生で映像作家の今村彩子氏)。第2部は神戸大学発達科学部教授・河崎佳子氏による基調講演「きこえない人々の心に触れて」。第3部は今村氏と河崎氏による対談「こころのふれあい」。

問い合わせ: 臨床総合センター 神野正市

メール: sjinno@office.aichi-edu.ac.jp

Fax: 0566・26・2711

◆秋祭

11月19日(土)、20日(日)

第一共通棟などキャンパス一帯

テーマは「燃えろ秋祭 深めろ絆 この秋 嵐を巻き起こせ」。出店、ステージ、ミニゲーム、スポ祭など。また、今年は目玉企画の「借り物競走」「mission-暗号解読」も。詳細は秋祭HPを参照。

URL <http://www/aue-festival.aichi-edu.ac.jp/akisai/atop.html>

◆愛知教育大学音楽科有志団体「ミュリム」ミュージカル発表会

11月20日(日) 17:00会場、17:30開演 入場無料

大府市勤労文化会館 もちのきホール

音楽科1、2年生有志によるミュージカル発表会。演目は「夢から醒めた夢」

問い合わせ: 「ミュリム」代表・野々山

メール: muream_obu@yahoo.co.jp

◆折り紙展

11月20日(日)~27日(日) 10:00~17:00 水曜休館 入場無料

刈谷駅前商店街 スペースAqua

同商店街と本学との共同連携事業「UNOセレクション」第7弾。折り紙サークルによる大作を展示。23日からは衣浦小児童の作品展も同時開催。

問い合わせ: 刈谷駅前商店街振興組合

TEL: 0566・23・2488

編集後記

「日銀グランプリ」決勝出場という吉報を知り調べてみると、決勝に残った上位5チームは東大教養学部、東大文学部・京大経済学部、明治大商学部、東京経済大経営学部、そして本学。やはり教育学部は異質の存在らしい。社会人になってからずっと「なぜ学校でお金や保険、年金のような生活に必要な経済の知識をもっと教えてくれなかったの」と疑問だったので、教育大進出に個人的にはエールを送りたい。子どものころから経済に関心を持たせるような教育を先生がで

きるようになれば、日本経済の未来も明るいものになるかも知れない。本学の二人には自信を持って挑んでほしい。頑張れ～！愛教大チーム！！(K)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

メール:kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者:総務担当理事 折出 健二